２０１３／０４／１４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：あなたはキリスト者ですか？
聖書箇所：マタイの福音書　７章１３－１４節

　先週、マスコミは戦争のうわさでもちきりでした。そして、昨日、私たちは大変大きな地震を経験しました。私たちの周りに起こるこのような様々な出来事を見て、また、経験して、恐らく皆さんは「終わりが近い」と感じられたことでしょう。確かにそうです。聖書のみことばは「終わりの日」にはどのような印があるのか、どのような兆候があるのかを確かに記しています。それを見るなら、私たちは今、間違いなく終わりの時に住んでいると言うことができます。戦争のうわさを聞くし、様々な自然界における異変も起こっています。そのようなみことばを見て改めて教えられることは、世の終わりが近づけば近づくほど、偽キリストやまた偽りの預言者たちの活動がますます活発になっていくということです。
　偽りの教師たちは「惑わす」という働きを常に熱心に行なって来たし、またこれからも行ない続けていきます。例えば、パウロの時代においてもそのような人々は熱心でした。パウロが開拓をしたあのガラテヤの教会にも偽りの教師たちが入り込んで、「ほかの福音を教えている」とパウロ自身が証しています。ガラテヤ１：６に**「私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。」**とあります。どのような教えが入り込んでいたのでしょう？それは、異邦人が救いに至るには彼らがユダヤ教に改宗をしてモーセの律法を守らなければいけないというものでした。このような人間的な教えを伝えていたのです。そこでパウロはガラテヤ人への手紙の中で「信仰によってのみ救いを得ることが出来る」と改めて教えています。
　ですから、パウロの時代にもそのような偽りの教師たちが存在していました。それは言うまでもありません。今の時代も同じです。私たちの周りでも、この日本においても、間違った教えを語る人たちがいるということは事実です。私たちもよくこのようなことを耳にしました。「イエスを信じたらあなたは健康になります。あなたは富を得ます。また、繁栄が約束されます。」と、残念ながら、このようなことを約束する福音のメッセージが語られ始めました。ある時、アメリカのある一つのテレビ局が、「これは本当に信仰なのか？それともビジネスなのか？」ということで特集を組んだことがあります。いずれにしろ、どの時代に住んでいようと、どこの国に住んでいようと、私たち信仰者の責任は「常に神のおことばに立つ」ということです。今、私たちが賛美したように、私たちの信仰はこの聖書に立っています。あなたの信仰がしっかりとしたものとして、そして、どのような偽りの教えにも惑わされないためには、みことばにしっかりと立つことが必要です。
　かつて、シカゴのムーディ教会の牧師であったウォーレン・ウァズビーがこのようなことを言っています。「偽りの預言者が存在しているゆえに、我々は惑わしに気をつけなければならない。しかし、最も危険なのは自己欺瞞である。」と。それが最も危険だと言うのです。恐らく、その最たるものは「救われていない人が救われていると信じ込むこと」です。実は、そのような問題がイエスの時代にもありました。多くの人々は信仰を持っていると思っているけれど実はそうではなかったのです。その結果、主ご自身がそのことを警告なさっています。ですから、みことばを見ると常に私たちはそのことがチャレンジされています。聖餐式のときにひとり一人自分の信仰を吟味しなさいと言われるのは、この信仰に関していい加減であってはならないからです。この救いに関していい加減であってはならないからです。なぜなら、そこにはあなたの永遠が掛かっているからです。どうすれば私たちはこのような誤った教えに惑わされないのでしょう？先程も話したように、みことばに立つことです。この救いに関しても、救われていると思っているけれど実はそうではなかったということがないためには、私たちはしっかりとみことばを見ることが必要です。
　そこで今日、私たちは最も大切なこの救いのメッセージについて見ていくのですが、今日のテキストはマタイの福音書７章です。「山上の説教」の最後のところに今私たちは目を向けたいと思います。マタイ７章１３－１４節の箇所を見ます。**「:13 狭い門から入りなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこから入って行く者が多いのです。:14 いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」**、イエスがここで何を語っておられるのでしょう？結論を言うと「救いのメッセージ」です。

☆「救いのメッセージ」について
Ａ．主の語られた救いのメッセージ

◎主の命令

１３節と１４節を見ると、ここにはイエスの命令が記されています。**「狭い門から入りなさい」**とあります。この聖書の箇所に対して、確かに、ある教団やある教会は「この山上の説教はユダヤ人に対して与えられたものであって、我々異邦人には関係がない。」とそのように教えていることも事実です。また、ある人たちは「この山上の説教は今のこの恵みの時代に住む私たちに対してではなくて、後の時代、千年王国のときの話である。」と言います。でも、私たちが考えてみなければいけないことは、果して、聖書がそのように教えているかどうかです。というのは、今私たちが見ようとしているマタイの福音書の５章から７章までの「山上の説教」は、ルカの福音書６章１７節から４９節にも記されているからです。その箇所を見ると、マタイの福音書５－７章のすべてではありませんが、見事に同じ内容のメッセージが記されていることに気付きます。そして、これがユダヤ人だけに対するものでないということは、今は時間がないので細かく見ることは出来ませんが、パウロの教えを見ると、まさに、パウロはこの山上の説教を知っていたことが明らかだからです。ペテロの教えを見るときに、確かに、彼はこの教えを知っていたことを私たちは確信します。そして、今日のテキストに戻って、マタイ７章１３節のところから、これが救いのメッセージであるということを今から簡単に説明します。四つの事柄を言いますので見てください。

１．文脈から

文脈から明らかにこれは救いのメッセージであることが分かります。山上の説教をイエスが語られたとき、「心の貧しい者は幸いです。」と５章３節からそのメッセージが始まるのですが、そこには六つの祝される人たちの特徴が記されています。神はこのような人たちを祝されると、その六つの特徴が挙げられています。そして、５章１７節には**「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思ってはなりません。廃棄するためにではなく、成就するために来たのです。」**と、ここに**「律法や預言者」**ということばが記されています。そして、７章１２節を見ると**「それで、何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者です。」**とあります。５章１７節のみことばが、７章１２節にも出て来るのです。実は、このような書き方をするのです。最初に語ったことを最後に再び語るのです。また、マタイの福音書で主イエス・キリストの誕生に関して１章２３節に**「…インマヌエルと呼ばれる。」（訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。）」**とありますが、２８章２０節を見ると**「…見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」**とあります。最初に**「神は私たちとともにおられる」**と言われ、そして、最後のところでそれをもう一度繰り返すのです。神が**「あなたがたとともにいます。」**と。新約聖書も旧約聖書もこのような書き方をするのです。

そして、５章１７節から７章１２節まで、主イエス・キリストは弟子たちと群衆に話された後、７章１３節からこのように言います。今まで語って来たこの祝福をあなた自身は頂いて生きるのか、それとも、この祝福をあなた自身は拒むのか、どちらかの選択をしなさいと。ですから、７章１３，１４節を見ると、そこには「二つの門」と「二つの道」が記されています。どちらを選びますか？ということです。そして、１５－２０節を見ると、「二種類の木」と「二種類の実」があります。あなたはどちらですか？と言うのです。２１－２３節を見ると「二種類の人」です。口だけの者と行ないのある人です。そして、２４－２７節を見ると「二種類の土台」について話しています。あなたは家を岩の上に建てているのか砂の上なのか？と。お分かりになりますか？このようにしてイエスは「神はこういう人を祝されます。こういう人を神は喜ばれます。」と話して来て、最後に、「では、あなたはどういう選択をするのですか？」と言うのです。

ですから、祝福を語ったイエスは、最後に救いのことを話すのです。なぜなら、この祝福を頂くためには私たちは救われなければいけないからです。神に逆らい続けている者がこの祝福を頂くことはないからです。今、なぜ、このようなことを話してしているか？もう一度思い出してください。イエスがこのメッセージをなさった時に、多くの人たちがこのメッセージを聞いているのですが、その中にはパリサイ人や律法学者たちがいたからです。ですから、山上の説教を見る時に、このようなことばがくり返して出て来ます。**「…あなたがたは聞いています。」**と。例えば、「自分の隣人を愛すること」とか「目には目で、歯には歯で」とか、このようなことをあなたがたは聞いている、つまり、そういう教えをあなたたちは聞いているけれども、神はこういうことを教えようとしていると言うのです。ですから、その当時の人々が教えられていた教えに対して、それは神の教えに外れているということを明らかにしたのです。そのことがこの山上の説教の中に繰り返し出て来るのです。

そして、イエス・キリストのおことばを見る時に、そのような宗教家である人たち、明らかに、自分たちは救われているし、自分たちは神に喜ばれていると思い込んでいた未信者たちに対して、主イエ

ス・キリストは「あなたがたはどちらの選択をするのですか？」と迫っていることが分かります。そして同時に、教師たちから教えを受けていた群衆にも、イエスは同じことを問われるのです。多くの人たち、特に、この宗教家たちは、律法を守ることによって救われると信じていただけでなく、自分たちの努力によってその律法を守ることが出来るとも信じていました。つまり、行ないによって私は天国に行くことが出来ると思っていたのです。そして、彼らは私たちがやっていることはすべて神に喜ばれると、そのように思っていました。だから、イエスは「そうではない」と明らかにされたのです。そして、救いに関して、神ご自身のメッセージを与えられたのです。イエスの関心は、行ないではなくてそれぞれの心です。そして、正しい選択をするようにとこの１３節から記されているのです。少なくとも、文脈を見るときに、１３節から記されているのは、主イエス・キリストご自身がなさった「救いへの招き」であることが分かります。

２．この語句の意味から

１３節に**「入りなさい」**という命令があります。**「狭い門から入りなさい」**と。実は、このことばは新約聖書に１９４回出て来ます。主ご自身はこのことばをどのような時に使われたのでしょう？

（１）「天の御国に入る」という意味で

マタイ５：２０**「…あなたがたは決して天の御国に、入れません。」**、７：２１**「…みな天の御国に入るのではなく、」**、１８：３**「…決して天の御国には、入れません。」**、１９：２３－２４**「…金持ちが天の御国に入るのはむずかしいことです。…金持ちが神の国に入るよりは、」**、２３：１３**「…天の御国をさえぎっているのです。」**。

（２）「いのちに入る」という意味で

つまり、「いのちを得る」ということです。マタイ１８：８－９**「…片手片足でいのちに入るほうが、…」**、１９：１７**「…もし、いのちに入りたいと思うなら、戒めを守りなさい。」** 。

このような箇所でこのことばが使われているのです。

マタイ１９：１７に **「イエスは彼に言われた。「なぜ、良いことについて、わたしに尋ねるのですか。良い方は、ひとりだけです。もし、<u>いのちに入りたいと思うなら</u>、戒めを守りなさい。」**とあり、同じ１９：２３には**「それから、イエスは弟子たちに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。金持ちが<u>天の御国に入る</u>のはむずかしいことです。」**と、同じことばが記されています。「いのちに入る」「天の御国に入る」、つまり、イエスはこのことばを「永遠のいのちにはいること」として使っておられるのです。「天の御国に入る」も「いのちに入る」も同じことです。救いに至るということです。

ですから、今日のテキストの７章１３節を見ると**「狭い門からはいりなさい」**とあって、救いを頂くためには狭い門から入ることが必要だということです。ですから、この語句の意味からもこれは救いのことであると結論づけることが出来ます。

３．文法から

三つ目の理由は、実は、この「門」「道」ということばには定冠詞が付いていることです。１４節の**「いのちに至る門は小さく、」**のこの「門」の前にも定冠詞が付いています。そして、**「その道は狭く」**と、この「道」の前にも付けているのです。なぜ、そのようなことをしたのでしょう？これは「特別な門」であり、また、「特別な道」だからです。なぜなら、「門」は「いのちに至る門であり」、「道は」は「いのちに至る道」だからです。そして、ご存じのように、この「門」は「救い主のこと」を比喩的にこのように呼んでいるのです。

思い出しませんか、皆さん？イエスは**「わたしは門です。だれでも、わたしを通って入るなら、救われます。…」**（ヨハネ１０：９）と言われましたが、その「門」の前にも定冠詞が付いています。**「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。…」**（ヨハネ１４：６）でも「道」の前には同じように定冠詞を付けています。つまり、イエスは、あなたはこの地上にあるどのような宗教を信じても究極的に救いに至ることはないと言われているのです。救いに至る門は一つであり、救いに至る道は一つだと言うのです。このイエス・キリストこそがその「門」であり「道」であると言われたのです。だから、人間が考え出したありとあらゆる宗教は、悲しいことに、私たちを天国に導くことは出来ないのです。罪の赦しをもたらすことはないのです。私たちのために人となってこの世に来てくださった主ご自身がそのことを言われたのです。イエス・キリストだけが救い主であること、イエス・キリストだけが私たち罪人をこの救いに導くことの出来るお方であると。ですから、「狭い門からはいりなさい。救いをもたらす唯一の門から入りなさい。」と、言い方を変えるなら、救いをもたらすことの出来る唯一の救い主イエス・キリストを信じるようにと言うのです。

４．現状から　　１３ｂ－１４節

もう一つの理由です。この１３－１４節を見るとまさに私たちの現状を表わしていると言えます。**「滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいって行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」**。つまり、救いを選択する人が少ない、受け入れる人が少ないという現実です。この**「見いだす」**という動詞の意味は「捜して見つけ出す」です。私たちはいろいろな人と話をしますが、殆どの人は神について関心がありません。神がいることを知っていていろんな宗教を持ってはいます。そして、「困った時には神のところに行く」と言います。でも、悲しいことに、手を合わせる存在が真の神なのかどうか、そこまで考えようとしないのです。まさに、ローマ人への手紙１章でパウロが言った通りです。１：２１－２５**「それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。:22 彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。:24 それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。:25 それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。アーメン。」**。みな「知っている」と言うのです。神はこの自然界を通して私たちに主ご自身の存在を明らかにしているし、私たち自身も神から良心というものを頂いています。少なくとも、私たちの内には、完全でなくても善悪を判断する物差しが備わっています。私たちは間違ったことをした時に「間違った」と思います。それは私たちの内にそのように判断する物差しがあるからです。神は私たち人間をそのようにお造りになったからです。そして、神ご自身が造られた被造物によって、私たちに神の存在を明らかに示しています。問題は私たちです。神を探ろうとしないのです。探って神を見いだそうとしないのです。

先ほど見たローマ１：２２－２３で**「彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、:23 不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」**とパウロは言っています。私たちが崇拝して来たものを見た時に、それは死んでしまった人間であったり、動物であったり、人間が造ったものです。それらが聖書が教えている神と異なることは明らかです。聖書が教えている神はすべてをお造りになった神です。いのちを与えるいのちの源です。人間は創造主になり得ないし、動物が創造主になり得ることなどありません。神がお造りになった被造物は私たちにそのことを明らかにしています。でも、私たちはその神について考えようとしないと言います。だから、罪人が神の前に立ってさばきを受ける時に、だれ一人としてその神に対して弁解できないのです。神がいることを知っているのです。でも、私たちが自らの意志でもってその神を拒んで来たし、拒んでいる人々がこの世の中に満ちあふれているのです。

まだ、イエス・キリストを信じておられない皆さん、あなたが覚えなければいけないことは、あなたがそのような選択をしているということです。あなた自身が、あなたをお造りになった神、そして、あなたを罪から救ってくださる神を自らの意志で拒んでいるのです。あなたの罪の報いはあなたに来ます。必ず！このみことばが私たちに言うように、残念ながら、多くの人々は大きな門から入り、そして、広い道を歩いています。彼らはイエス・キリストを信じようとしないのです。

ですから、今、四つのことを見て来ましたが、確かに、この７章の後半に記されていることが「救い」であると、私たちは見ることができるのです。

Ｂ．主の語られた救いのメッセージの内容

次に私たちが見るのは、では、イエスはここで何を語られたのか、その「救いのメッセージの内容」です。確かに、「狭い門」「大きな門」、「狭い道」「広い道」とこれらのことが比較されていることは明らかですが、少なくとも、このみことばから分かることは、「狭い門」は「狭い道」へと導いていくということです。すなわち、「狭い門」から入った人、イエス・キリストを信じて救われた人たちは、神が喜ばれる歩みへと導かれていくのです。でも、「広い門」は「広い道」へと導いていきます。つまり、神に逆らう者たちは益々神に逆らう罪の生き方へと導かれていくと、結論から言うと、そういうことになります。

そこで、この１３，１４節で**「狭い門からはいりなさい」**とイエスご自身が言われましたが、私たちは救いに関してもう何度も学んで来ています。このようにまとめることができます。「あなたの罪を赦していただくために、今、罪を悔い改めて、神が備えてくださった救い主、主イエスによる救いを受け入れなさい。」と。私たちはみな例外なく、神の前に正しくない歩みをして来ました。私たちを造ってくださった神のみこころにことごとく逆らい、神の命令に背き、自分勝手な罪の歩みをして来ました。その罪を認めることです。そして、その生き方を止めて、神の前に正しく歩んでいくという、本来の正し

いあるべき生き方を「私は歩んでいきたい」とそのような決心をすることです。間違った罪から離れて、神が造ってくださった創造の目的に沿った本来の生き方をしたいと、心から罪を悔い改めて、主イエス・キリストが十字架と復活で成し遂げてくださった完全な救いのみわざ、贖いのみわざを信じ受け入れること、その時にあなたはこの救いを頂くのです。

このように言うことができます。私たち人間はみな例外なく、神を愛する者として造られました。ところが、私たちはこの神を愛することを拒み、神よりも自分を愛するという選択をして来ました。神よりも自分が大切なのです。周りの人よりも自分が大切なのです。自分が幸せであればいい、自分のやりたいことが出来ればいいと、神を愛するよりも自分を愛する者としての歩みをして来たのです。また、今も多くの人々がそのような歩みをしています。ですから、私たちは人々に言うのです。「あなたをお造りになった神を愛する者になりなさい。」と。

イエスがこのメッセージを語られた時に、聴衆たちが「それぞれが自分の心を正しく吟味して、正しくこの救いを受け入れて、そして、間違いなく、だれ一人この救いから漏れることがないように」とそのことを願っておられたことを見て取ることが出来ます。なぜなら、私たちもそのことを願っているからです。この礼拝に集っておられる皆さんおひとり一人がこの救いを間違いなくご自分のものとされることを何よりも願います。教会に長い間来ていても、様々な奉仕をしていても、聖書の知識をたくさん持っていても、主イエス・キリストを個人的に知らなければ、あなたはこの瞬間に永遠の滅びに向かっていると言います。あなたが永遠の滅びに至るなど私たちは耐えられません。だから、あなたはしっかりと考えなければいけません。神が何を言われているのか、そして同時に、私はどのような選択をするのか、そのことを考えなければいけません。

イエスはここで非常に厳しいメッセージをなさっています。でも、それは真理のメッセージです。イエスが言いたかったことは、本当の信仰には犠牲が伴うということです。「あなたは天国に行きたいですか？では、イエス様を信じなさい。地獄に行きたくないでしょう？それなら、イエス様を信じなさい。」と、このような安易な、また、安価な福音を語る人たちが絶対に語りたくないことをイエスは言われたのです。イエスは「わたしを信じるならそこにはいろんな苦しみや困難が伴います。でも、それでもわたしを信じるか！？」と言われたのです。

◎私たちが自らに問いかけなければならないこと

私たちは次の三つのことを考えなければならないと思います。

１．どのような困難な中でも主を愛するか？

先ほども話したように、もう皆さんは経験しておられます。信仰者として生きることは大変です。この日本という国にあって、神に忠実に従い続けていくことは非常に難しいです。なぜなら、世界広しと言えど、これほど神に逆らう国はありますか？あの中国でも日本よりもはるかに多くのイエス・キリストを信じる人たちがいるのです。先日、私のいた宣教団体の宣教師からメッセージが届いていました。グアム島から北朝鮮にメッセージが届いているとありました。それは私たちは天に行くまで分からないことです。でも、確実に、神はあの国にあっても救われる人たちを起こしておられることでしょう。かつては、あのタイが伝道においては一番難しいと言われていました。仏教国でどこに行っても仏教の寺院があります。しかし、神はその中で救われる人を起こしておられます。宗教の自由がありながらこの日本、私たちの国の現状はどうでしょう？なぜ、私たちの国にあってイエス・キリストを信じる人が少ないのでしょう？

いろいろな理由があるでしょうが、その一つは、もしかすると、私たちが良いことばかりを語っているからかもしれません。先ほども言ったように、イエスを信じたらすべてがバラ色で何の問題もなくて…と。実は、イエスを信じることによって私たちは様々な問題を経験するのです。こんなことはありませんでしたか？もし、イエスを信じなかったらもっと楽ではなかったか？こんなにいろいろな面で摩擦を経験するなんて…と。イエスはこの山上の説教の中でこのように言われました。マタイの福音書５：１１－１２**「わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。:12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」**と、「天において大きな報いがある」と確かに言われています。でも、イエスが約束されたことは、地上にいてあなたがたは人々がわたしを迫害したように、あなたがたも迫害されるということです。**「ありもしないことで悪口を」**言われるというのです。パウロはⅡテモテ３：１２で**「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」**とそのように約束されていると記しています。多くの皆さんはそのような経験をしておられるでしょう。

私たちは様々なところで異教の習慣の中で戦わなければいけません。偶像崇拝の中にいるのです。「それはしません」と言った時にはいろんな摩擦があります。話したように、私の父の兄は私たち家族がイエス・キリストを信じた時に、私たちの家族とは「もう断絶だ」と言いました。皆さんも経験されているようにそのようなことがあるのです。イエスは言われました。「狭い門から入りなさい」と。つまり、私たちがこのイエス・キリストを信じる時に覚悟しなければいけないことがあるのです。主のために苦しむ覚悟です。なぜなら、この「狭く」ということばは「上から強く圧する、押しつぶす、悩ます、苦しめる」という意味をもったことばだからです。それを「狭く」と訳したのです。「狭く」と言うと一人がやっと通れる位の狭さ、スペースを考えてしまうのですが、このことばの持っている意味は、上から強く圧迫されるような、押しつぶされるような、悩まされるような非常な苦しみです。もっと言うなら、「困難」です。そのような意味を持ったことばを主イエスは使われたのです。

実は、この「狭く」ということばは新約聖書の中に１０回出て来ます。

マルコ３：９「イエスは、大ぜいの人なので、押し寄せて来ないよう、ご自分のために小舟を用意しておくように弟子たちに言いつけられた。

Ⅱコリント１：６「もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。」

Ⅱコリント４：８「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。」

Ⅱコリント７：５「マケドニヤに着いたとき、私たちの身には少しの安らぎもなく、さまざまの苦しみに会って、外には戦い、うちには恐れがありました。」

Ⅰテサロニケ３：４「あなたがたのところにいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。」

Ⅱテサロニケ１：６「つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、

Ⅱテサロニケ１：７「苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。」

Ⅰテモテ５：１０「良い行いによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。」

ヘブル１１：３７「また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、」

このように、困難がやって来るということです。ですから、イエスは「狭い門から入りなさい」と言って救いへの招きをしておられるのですが、イエスが言われたことは「あなたがたが覚えておかなければいけないことは、わたしを信じること、そこには必ず様々な困難が伴う。」ということです。

２．どのような犠牲を強いられても主を愛するか？

ある役人がイエスのもとにやって来ます。ルカの福音書１８章に書かれています。その並行箇所はマタイの福音書１９章ですが、そこにはその役人は「ひとりの人が、」とあり、それは青年であったと書かれています。彼は１９：１６**「先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。」**と言います。最後に、イエスは**「もし、あなたが完全になりたいなら、帰って、あなたの持ち物を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」**（マタイ１９：２１）と答えておられます。もし必要なら、あなたはすべてのものを犠牲にする備えが出来ていますかと問われるのです。

３．自分よりも主を愛するか？

イエスは何度も「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨てて自分の十字架を負ってわたしについて来なさい。」と言われました。新約聖書にはそのことを５回繰り返しています。

マタイ１０：３８「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」

マタイ１６：２４「それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

マルコ８：３４「それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

ルカ９：２３「イエスは、みなの者に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、

日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

ルカ１４：２７　「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」

あなたはわたしを信じるために、もし、それがみこころなら喜んで自分自身を捨てることが出来ますか？と問われているのです。残念ながら、このようなメッセージを私たちは聞きません。なぜなら、ここんなメッセージをすると罪人はみなが逃げていってしまうと、人間的にはそのように思うからです。「こんな厳しいメッセージなら私はとても…」と言うでしょう。でも、このメッセージをイエスは語られたのです。ここにおられる多くの皆さん、今、「どのような困難の中でもわたしを愛しますか？」、また、「どのような犠牲もわたしのために喜んで払いますか？」、「あなたは自分よりもわたしを愛しますか？」と、そのように主ご自身が問いかけておられるのです。

確かに、私たちは恐れます。もし、イエスを信じることによって自分のいのちが奪われてしまうなら、自分の愛する家族が…、といろいろなことを考えてしまいます。でも皆さん、私たちがみことばに立つなら、その不安に対する主の約束はこうです。「主はすべてのことをあなたのためにしてくださる。あなたの益のために。」。主はあなたのために喜んでいのちを捨ててくださったのです。私たちが考える意地悪な主人ではないのです。苦しめてやろう、懲らしめてやろうではありません。あなたを愛するがゆえにあなたのためにいのちを捨ててくださった主なのです。あなたにとって最善なこと、あなたの信仰が成長するように主はすべてのことをしてくださるのです。しかし、私たちが考えなければいけないことは、そのように私を愛してくださり、私のためにご自身のいのちを捨ててくださったこの主を信じて、この方に従うとするなら、私はどんな犠牲でも喜んで払う決心が出来るかということです。どんな困難でも私は受け入れる。そして、自分のいのちさえも私は喜んで主におささげすると、そのような決心をしているかどうかと問われたのです。

皆さんにも同じことをチャレンジしなければいけません。あなたの信仰はどうですか？ご利益主義になっていませんか？ただ、天国に行きたいから…、何か自分の欲しい物を得るためにイエスを信じている、そのようなことはありませんか？

Ｃ．主の勧め

最後に、主の勧めを見てください。**「狭い門からはいりなさい。」**と言われました。実は、この語句を分析して時制を見ると、また、これが命令形であることを見た時に、ここでイエスが与えた命令は重要であるだけでなく、緊急性を表わしています。そして、聞いている者たちに決心を促しているのです。つまり、イエスはここで「あなたはどうするのですか？」とそのことを問うておられるのです。「狭い門から入りなさい」、救いは個人的なものだ、あなた自身が神の前に決心しなければいけないことなのです。聖書をたくさん知っているとか、幼い時から聖書を教えられて来たとか、それだけではあなたにこの救いが与えられるということにはならないのです。問題は、あなた自身がこのイエス・キリストを心から信じ受け入れるかどうかです。どのような選択をしますか？ということです。

思い出しませんか？ヨシュアはこう言いました。ヨシュア記２４：１５**「もしも【主】に仕えることがあなたがたの気に入らないなら、川の向こうにいたあなたがたの先祖たちが仕えた神々でも、今あなたがたが住んでいる地のエモリ人の神々でも、あなたがたが仕えようと思うものを、どれでも、きょう選ぶがよい。私と私の家とは、【主】に仕える。」**と、このようにヨシュアは宣言するのです。「あなたがたは今決めなさい。どの神を選択するのか。」と。このイスラエルの神が、創造の神、すべてをお造りになった神が、この救いを与えてくださる神が気に入らないなら、どのような神でも選びなさいと。でも、ヨシュアは言うのです。**「私と私の家とは、【主】に仕える。」**と。つまり、神は常に私たちひとり一人に、あなたに対してどんな選択をするのかを迫っておられるのです。実は、ここでもイエスは同じように「狭い門から入りなさい。今、あなたはそれを決めなければいけない。」と言われるのです。だれであっても、明日のことは分かりません。今この救いの機会がある時に「あなたは狭い門から入って来なさい。わたしを信じて、そして、この救いに与るように。」と。そのようにイエスは招いておられるのです。

私たちは何かを頂くために信じるのではないのです。よく考えてください。問題からの解放のため、病気が癒されるため、会社が倒産しかかっているからその倒産から免れるため、志望校の受験に合格するため、幸せになるため、人間関係を上手くやるため、地獄に行きたくないから、ただ天国に行きたいから、「だから、信じる」のではないのです。この聖書が教える神が、すべてをお造りなった創造の神、真の神だから信じるのです。このお方に逆らって来たから、その罪を悔い改めて、この神の前に正しく生きたいと望むから、私はこの方を信じるのです。この方を信じ、この方を自分よりも何よりも愛して生きることが神の前に正しいことだからそのようにしようとするのです。

そして、皆さん、考えてください。そのように私たちが生きたとして、その結果、あくまでも仮定の話ですが、主が私たちを地獄に送られたとしても、私たちは何一つ神の前に不平を言うことは出来ないのです。それが私たちにふさわしい場所だからです。しかし、感謝なことに、神の前に赦しを求めて出て行くなら、神は私たちの罪を赦してくださるのです。なぜ、この神を拒み続けるのかですか？

神の前に正しくありなさい、神に逆らって来たあなたがその罪を悔い改めて、この神を心から信じて、この神を愛する者として歩み始めなさいと言われるのです。最初にも話したシカゴ教会の牧師であったウォーレン・ウァズビーがこのように言います。「信仰の最初のテストとして『キリスト信仰の告白は何かあなたに犠牲をもたらしたか？』」と。イエスを信じたという告白をすることによって、何かあなたに犠牲をもたらしたか？と言うのです。皆さんも経験されているでしょう？イエスを信じることによって、先に話したようにいろんな困難を経験しているかもしれない、批判を経験しているかもしれない、悪口を経験しているかもしれない。ウォーレン・ウァズビーは「もし、あなたに何の犠牲ももたらしていないとするなら、あなたの告白は本物ではなかった。」と言います。つまり、イエス・キリストを信じる時には、必ず、様々な困難が付いてくるということです。でも、私たちは信じたのです。この方が真の神だから、この方だけが私たちを罪から救ってくださる唯一の門であり、唯一の道だからです。「狭い門から入りなさい」と、そこに神の祝福があるのです。救いがあるのです。

ここにおられるすべての人が、この祝福に与ることを願います。

《考えましょう》

１．狭い門と狭い道は、何を意味するのでしょうか？
２．大きな門と広い道は、何を意味するのでしょうか？
３．今日の教会で、「狭い門から入りなさい」という救いのメッセージを聞くことが少なくなりました。それは、どうしてなのでしょう？
４．「これでは、信じる人が起こらない」と、人間的には思えてしまうこのメッセージを語ることの大切さを挙げてください。